D 95

身体寸法と被服寸法に関する意識
―静岡県の１９歳から２１歳の男女について―

静岡大教育　大村知子　○渡邊敬子　美子 Hill

目的　被服が身体に適合し、生活活動を妨げず生理機能を保持するということは、着心地の良さの重要な条件の一つであると考える。今日、被服調達方法は、既製衣料の利用が大半である。着用者は自己の身体寸法や体型に適合する被服を選択することが重要である。しかし、現在、正確で系統だった情報を得る機会は少ない。本研究は、20歳前後の男女が、自己の身体寸法や体型について把握している程度や被服寸法に関して知識を得ている様相を把握し、消費者教育や男女共学の家庭科での家庭生活領域・被服領域での取扱いについて検討する資料を得る目的で調査を行った。

方法　調査は、1990年７月から９月にかけて、静岡県内に在住する19歳から21歳の男女１８７名を対象に、アンケート形式による質問紙調査と身体計測を実施した。質問紙調査の調査項目は、自己の身体寸法に関する認識、被服寸法に関する認識と被服の身体への適合に関する意識についての計46項目である。身体計測調査は工業技術院体格調査の方法に基づき、男子52項目、女子55項目について、マルチン式計測器などを用いて計測を実施した。それらの資料を用いて、基本集計、クロス集計等により分析を試みた。

結果　自己の身長・体重について正しく把握できている者は、身長が90％、体重が82％であった。胸囲・胴囲・腰囲・サイズの号数・体型・ブラジャーのカップサイズについては、知らない者や計測値と自己の認識する寸法との差が大きい者が目立った。また、既製衣料は身体のいずれかの部位において、適合しないという認識を持つものが、多く存在する。しかし、実測値とサイズ規格との照合をした結果、不適合の者は僅かであった。